

---

# THE IDOLM@STER -original generations-

こもも

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

THE IDOLM@STER - original generations -

### 【Nコード】

N2024V

### 【作者名】

こもも

### 【あらすじ】

博打好きなフリーターである南部響介は、宇宙の監視者と名乗るエリンギ・ノイレジセアと出会い、就職を決意する。しかしノイレジセアに勧められた就職先はなんと芸能プロダクション“765プロ”だった。それぞれの輝きを持つ少女達と出会い、彼女達と一緒にアイドル界のトップを目指すことに決めた響介だが、果たしてそれができるのだろうか？そして、響介に協力するノイレジセア、彼の本当の目的とは一体何だ？ アイマスとスパロボのクロ

SSSです。作者の文才のなさは大目に見てください。

「なぜこんなことに……」

夕日の光に照らされている小さな公園の中、ペンチに座っている赤いジャケットを着た青年が頭を抱えて、深刻な表情をしていた。

今、彼の手に握っている携帯の液晶画面には、「現在残高 1,800円」という文字が表示されていた。

ポケットから財布を取り出して中身を確かめると、中にも野口一枚しかなかった。

「食費を節約しても、アパートの家賃が……」

手で顔を押しさえて、彼は盛大なため息をついた。

「ハア……」

青年の名は、南部響介。

そして今、彼は金欠という名の危機に陥っている最中である。

「うん……ここで悩んでも仕方がない」

携帯を仕舞って、響介はペンチから腰を上げた。

考えでも金は空から降って来ない。今日はとりあえず家に帰って、明日から対策を考えればいい。そう決めた彼は公園の出口に泊めている愛車、その真っ赤なスポーツ自転車に跨った。

勿論、ガソリン代すら払えない彼にとって、バイクなんてしゃれたものを買える筈もなかった。

「……スーパーに寄っておくか」

ペダルを漕いで、響介は帰りに食料を調達しておくことに決めた。

公園から響介のアパートまで途中にスーパーは一軒しかない。彼もそのスーパーの世話になる事が多い。

スーパーに入ると、響介カップ麺のコーナーへ直行した。途中に経過した惣菜コーナーから漂っている揚げたてのコロッケとメンチ、

そして焼き蕎麦の美味しそうな匂いに気を取られてはいけない。ただひたすらにカップ麺をカゴに入れる。

「これで数日は持つか」

とは言え、状況は楽観できない。早く家に帰って対策を練らなければ、来るべき家賃支払日を凌ぐことができそうにない。そう思っ  
て、響介は早足で会計に向かった。

「静寂な……世界……」

「うん!？」

野菜コーナーを通りかかったとき、突然に声が響介の耳元に響いた。立ち止って周囲を見てみると、こっちを見つめている者はだれも居なかった。

「空耳か？」

最近はカップ麺ばかりの食生活を過ごしているため、栄養不足で衰弱しているじゃないかと発想が、響介の頭に過ぎる。

「新鮮な野菜はいかがですか？ 安いですよ？」

立ち止った響介を見て、スーパーの店員が話しをかけたきた。

「野菜か」

自分の側にある野菜コーナーに目をやると、おばさん達に荒らされた後のそこには野菜のパック詰めが少し残っていた。

「そうだな……」

そう呟きながら、響介は隅の方に置いてあるエリンギのパック詰めを手を取った。パックの中には、太いエリンギ一本が入っていた。

「炒めてカップ麺にトッピングするか」

そのエリンギをカゴに入れて、響介は再び会計に向った。

「ふっ、疲れたぜ」

鍵でドアを開けて、響介は自分の部屋に入る。

二階立てのこのアパートはトイレと風呂、そして簡単キッチンもついているが、部屋自体は古くて狭いし、壁とかも薄い。部屋の中

には簡単な家具一式が揃えているが、そのどれも古い安物である。そして二階の奥で部屋で、響介は一人でフリーター生活を送っていた。だが今月の家賃支払日までには家賃を用意できなければ、ここから追い出されてしまう。

「さて、まずはお湯だな」

そんな深刻な問題を考える前に、まずは腹掬えだ。カップ麺を一個だけ残して他のを棚に仕舞って、ヤカンに水を入れてガスコンロの上に置く。

「湯が沸く前にエリンギを切っておく」

ジャケットをベッドに脱ぎ捨ててから台所に戻った響介は、パツクのビニール膜を破ってエリンギを取り出して、俎板の上に置く。

「今日はとりあえず半分だけを……」

財布の事情もあって、一回だけで食べ切るのはちよつと勿体無い気がするので、とりあえず半分だけにしようと思った響介は包丁を握って、エリンギを指で押さえた。

「ちよつと待てええええ!!」

突然、部屋にド迫力のあるおじさんの声が響いた。

「……!!」

慌てて振り返ってみると、部屋の中に誰もいない。

「……誰だ!？」

警戒心を強めたまま、響介は大声で部屋の中に向かって叫んだ。

「どこに向いておる? 我はこつちだ」

「うん?」

身近の場所から声を聞こえた気がして、響介は視線を正面に戻す。

「どこだ?」

「ここだ。ここ」

「……何の冗談だ。これは」

声の元へ辿ると、響介の顔が青くなった。

そこにあるのは、自分が今切ろうとしているエリンギだった。

「エリンギが……喋っただと?!」  
手をエリンギから離れて、響介は一步後ずさった。

「エリンギが喋るのが、そんなに驚くことか」  
今度こそはつきり確認できた。声の主は、間違いなく俎板の上のエリンギだった。

「……」  
「まったく、腑抜けた顔しおって、肝の小さいチキン野郎だ」

「……」  
「どうした……って包丁はやめろ! 食い込んで、食い込んでるから今すぐやめろ! ぉおぉお!!」

（十五分後）

「それで、貴様は何なんだ。野菜型異星人か？」  
ベッドに腰をかけてカツプ麺を啜りながら、響介はテーブルの上にある、エリンギに質問を投げた。

「うむ。発想は悪くないが、違うな。我が名はノイレジセイア、この宇宙の監視者たるものだ」

「スーパァで割引シール張られて売り飛ばされるのが監視者の仕事か？」

「うるせええええ! こっちにも事情つてもんがああああるんだああ!」

エリンギだから表情は見えないが、彼(?)の声が裏返っていた。

「そもそも何でエリンギだ? 大それた肩書きの割りに、随分と安い姿しているな」

「こ、これは我の本当の姿ではなああい! 養分さえ足りれば、直ぐにでも……!」

「つまり、椎茸になれるんだな」

「成れん! 大体何で椎茸何んだ! 椎茸になったらお前はど

する気だ！」

「……ふん」

「何その笑み、怖いぞ！！」

「まあ、とにかくお前の正体は分かった」

カップ麺のスープを飲み終わった響介は空になったカップを捨てて、エリンギを持ってキッチンに入った。

「そうか。分ってくればそれでよし。私の使命を続行するために、まずは水を……って包丁は止めると言ったはずだ！」

再びエリンギを俎板に置いて、響介は包丁を手に取った。

「生憎こつちにも事情があるのでな。出費の無駄を避けたい」

「ちよっ！ 待てええ！ 切らないでくれ！」

「でも言葉を話せるからって、スーパーに返品もできないし」

「そ、それなら金になる情報を教えてやる！ それでどうだ！

金が欲しいだろう！？」

「……」

金という単語を聞くと、響介は握っている包丁の動きを止めた。

「……よく俺が金欠しているのを分ったな。監視者とやらの力か？」

「ふん、そんな力に頼らずとも、お前のその貧相な面を見れば……ってフライパンに油を入れて何をやる気だ！ コンロに火を入れるな！」

「まったく、お前のせいで無駄にガス代を浪費しただろうか」

「コイツ……」

火を消した後、響介はノイレジセイアを紙カップに入れて部屋の真ん中のテーブルに置いた。

「それで、明日はどれを買えばいい？」

「はっ？」

新聞紙と赤鉛筆を持った響介の質問に、ノイレジセイアは面食らった。

「競馬だよ。どれを買えばいい」  
手に持っている新聞紙を揺らして、ノイレジセイアに見（？）せる。

競馬新聞だった。

「なぜ我に聞く」

「……金になる情報を俺に教えろと言ったのは貴様だろう」

「博打のことなど知らん。我が言ったのは、就職の情報を教えるという意味だ」

「何だ。宇宙の監視者とかほざいたくせに、それくらいも予知できないのか。がっかりだ」

「お前りがっかりだよ！ 博打にばかり頼っていると将来は後悔するぞ！」

「説教は止める。頭が痛くなる」

「ならちゃんと地を足をつけて働けええい！」

「断る。伊達や酔狂でギャンブラーをしているわけではない」

響介は重度のギャンブル好きだ。いつも金欠しているのも、普段バイトで入った金もいつも半分以上を博打に注ぎ込んでしまってるからである。

「酔狂だろう！ このダメ人間が！ こんなだからこの星の生命体は……！！」

「……口の利き方に気をつけろ」

「すみません」

響介の鋭い目付きに睨まれて、すぐに謝ってしまう弱気なノイレジセイアだった。

「と、とにかく仕事の情報を教えるから、そこで働いてみるよ」

「……」

「ちゃんと就職しないと、いつまでもこんなボロアパートに住まなきゃならんぞ」

「……」

ノイレジセイアに言われて、響介は部屋の中を見回す。

あちこちにひび割れが入っている壁。寝転がるたびに酷く揺れて今にでも崩れそうなベッド。叫んで蹴らないと画面が映らないテレビ。そして月に必ず一回くらい故障する給湯器。ここでの生活は割りりと慣れたつもりだが、改めていわれると確かお世辞でも快適とは言えない。

「働く、ね……」

「大体、家賃が払えないだろう？ それとも、追い出されて野宿するか？」

「……くっ」

確かにエリンギの言うとおり、背に腹はかえられない。まずは家賃の問題を何とかしなければ、この貧しい生活すら維持できない。

「いいから、私の言うとおりに働いてみる。損はさせんよ」

「……」

「……」

ノイレジセイアと数十秒間見詰め合った（エリンギだから目がどこにあるかは分らんが）後、響介は決意した。

「わかったよ。場所を言え、明日行って見るよ」

「まあ、待て。まずはコンビニに行って履歴書用紙を買って来い」

「……」

「どうした？」

「そんな金はない」

「こ、こいつ……仕方ない。ベランダにあるサボテンの鉢の裏を覗いて見る。500円玉が落ちているはずだ」

エリンギに言われたとおりベランダに行つて見ると、本当に500円玉があった。

「凄いな。なぜわかった」

「世界中の植物は全て私の目と耳だ。これくらいの情報は……つてどうしたそんな顔して」

「じゃ、どこに大金が埋めてるかも知っているな」

「……ちゃんと働こうよ」

「知っているな！ 知っているのだな！」

「働け！ このダメ人間が！」

なんやかんや騒いだ後、結局響介が履歴書を買って戻ったのは、深夜11時の事だった。

Track - 01 はじまり(後書き)

ご指摘と感想、あとネタもお願いします。

因みにやよいのpはクロウ・ブルーストに決めました。

Track 02 burning red 前篇(前書き)

タイトルと登場人物の関係性はありませんよ？

「まさかこんなに早く連絡が来るとは思わなかったな」

今は朝の七時。ベランダの手摺に留まっているはずめの囀りを聞きながら、響介は鏡の前でネクタイを締めていた。

昨日の朝に、ノイレジセイアが教えてくれた事務所に電話した後履歴書を送ったが、午後の電話で明日面接に来いと言われた。余程人手が不足しているのだろうか。

「私の情報に間違いはせんよ。この宇宙を監視しておるからな」

響介の後ろから、渋いおっさんの声が響いた。

振り返らずに目を鏡の隅にやると、そこにはノイレジセイアの姿が映っていた。

「お前の今の姿を見ていると、監視者云々の話も満更嘘でもないように思えてくるな」

昨日にノイレジセイアを入れた紙カップに少し水を入れてみたが、夜の頃に彼の姿は既にエリングギから懸離れたものになってしまった。今のノイレジセイアはエリングギよりも、植物の特徴を備えた鳥みたいな姿になっている。無機質な頭部、藤のような触手、そして樹葉みtainな翼も生えてきた。少々怖い感じもするが、お陰で面と向って会話することが出来るようになった。

「ふん、今のこれはまだ真の姿ではない。我が本当の姿を取り戻した暁には、静寂なる世界のためにまずこの星の生命体を……」

テーブルに置いてあるテレビのリモコンを操作しながら、ノイレジセイアは中二病患者みtainなことを呟き始めた。

「乾燥機に放り込むぞ」

「すみません。それだけはやめてください」  
姿が少し元に戻った所で、相変わらず主導権を握れないノイレジ  
セイアだった。

「これでよし。あとは……」

一張羅のスーツを身に纏った響介は、鞆を開けて持ち物に忘れ物  
がないかチェックする。

「うむ、これで万全だな。あとは本番でぶつけるのみ」

「まあ、待て」

鞆を持って玄関へ歩く響介を、ノイレジセイアは呼び止めた。

「何だ？」

「今朝早く目が覚めたのでな、弁当を作っておいたよ。そのまま  
仕事に入る可能性も高いから、もって行け」

立ち止った響介に、ノイレジセイアは触手を使ってテーブルの上  
にある、新聞紙で包まれたものを差し出した。

そしてそれを見た響介は硬直した。

「……何の真似だ」

「弁当を作ったといっておろうか」

「誰が」

「我が」

「……」

「冷蔵庫にある材料を勝手に使わせてもらったが、悪いがお握り  
しか作れなかった。明日の弁当にリクエストがあれば、帰りに材料  
を買って来い」

弁当を響介に渡した後、ノイレジセイアは視線をテレビに戻して、  
再びその器用な触手でリモコンを操作してチャンネルを変える。

なんと経済番組だった。

「……マジか。しかもこの新聞紙って、俺の競馬新聞じゃ……」  
手の中にあるまだ暖かさが残っている、新聞紙で包まれた弁当箱

を凝視して、響介は反応に困っていた。

「昨日スーパーで買ったエリンギが今日の朝でお握りの弁当を作ってくれた。しかも触手を使って。」

「どうやって米を握ったのが非常に気になる。」

「いや、それよりどうやって米を研いで炊飯器に入れたのか。」

「そもそもこの家に米なんてまだ残ってたのか。冷蔵庫に海苔があったのか。具は何を使った。」

「さっさと行け。面接に遅刻はまずいぞ。」

「あつ、ああ……。」

携帯で時間を確認すると、もうそんなに余裕はない。頭いっぱい疑問を抑えて弁当を鞆に仕舞って、響介は部屋の扉を開けた。

「行つてらつしゃあああゝゝい!!！」

「あつ、ああ。行つて来る。」

部屋の中でテレビを見ているノイレジセイアの無駄に迫力満点な言葉に、思わず応じてしまった。

「……まったく。何なんだあいつは。」

そう呟きながら、響介は早足で駅へ向った。

目的地は響介のアパートからそれ程離れていない。電車一本で30分もあれば十分だった。駅から出て10分ほど歩くと、響介は例の事務所のビル前に立っていた。

小さくてちよつと古めな雑居ビルだった。そして三階のガラス窓に、黄色のガムテープで「765」と書いてあった。

「765……ここで間違いないな。」

ここが今日の目的地、「765プロダクション」だ。ノイレジセイアの情報によると、そこそこ規模のある芸能プロダクションだが、事務処理の人手がかなり不足しているらしい。

ビルの一階は「たるき亭」という居酒屋になっている。裏にある入り口から入って、階段を登って三階まで上がると、事務所の名前が書かれているアルミドアが見えた。

「さて、ここからは正念場だな」  
衣装と髪を整えて、響介はそのドアを叩いた。

「はい」

中からの声を聞こえたと同時にドアが開き、そこから一人の女性が現れた。

緑色の事務員制服を着た、二十代の女性だった。

「えっと、昨日面接の連絡を頂いた……」

「あつ、南部響介さんですね？ どうぞ中に入ってください」

「はい」

案内されて事務所の中に入ると、女性は社長に知らせてくると言つて、玄関のすぐ左手にある部屋に入った。その間に、響介は視線を巡らせて事務所内を見回す。

大きさはそれ程でもないが、必要な部屋と機能をみっちり詰め込んだコンパクトな事務所だった。奥の部屋から人が電話している声が聞こえてくるが、多分事務所のスタッフだろう。

「……うん？」

壁に掛かった白板に書き込まれている大量な文字に興味を引かれて、響介は一步近寄った。

「スケジュール表か……」

白板には、日付と大量な行事が書かれていた。どうやらこの事務所は本当に忙しいらしい。

「あの、南部響介さん。社長が呼びです」

「あつ、はい」

書き込まれた内容を読んでいる間にさっきの女性に話しかけられて、響介は言われた通り社長室に入った。

「お邪魔します」

両側の壁に木製の書類収納棚がすらっと並んでいる社長室の奥に、

机の向こうに一人の男が座っていた。

「ああ、そこに座りたまえ」

入室した響介を見て、男は机の前の椅子を指してそう言った。

「はい」

椅子に座って、響介はその男と正面から向き合った。男も手元の書類を机に置いて、響介の目を真っ直ぐに見据えた。渋い雰囲気を漂っているその五十代後半の男の瞳の中から、優しさと厳しさが滲み出していた。

「南部響介くんだね。私はこの765プロタクシヨンの社長を務めている、高木順二郎だ。君の履歴書を読ませてもらったよ。中々に面白い人生を送っている様だな」

「いえ、生活に追われて精一杯に生きているだけです」

「あはは、謙遜はせんでいい。我が事務所に人手が足りてないのも事実だが、君の履歴書に私の興味が引かれたからこそ、こうして君を呼んだのよ」

「そうですか？ 自分では特に面白いと思つた事は」

高木社長は興味津々のように響介を見つめるが、響介はあくまで慎重な態度で対応する。

「そうかい？ ファッションモデルからカーレーサーに転職したかと思えば、いきなりIT業サラリーマン、そして実績を出した途端に辞職してフリーターに。いやはや、私も若い頃にはそれなりの無茶をしてきたつもりだが、まだ二十五も超えてない君には負けたよ」

「……………」  
響介の履歴書に嘘はない。今まで色んな仕事をして来たが、どれも長続きしなかった。

「刺激を求めているのかね？」

「……………そうかもしれないですね」

響介がギャンブルにはまる原因もそこにあった。あの勝敗を決め

る一瞬に感じる充実感、あれこそ響介がギャンブルを止められない最大な理由である。

「なら、我が事務所でプロデューサーをやってみないか？」

「プロデューサー、ですか？」

響介が志願したは、事務処理の仕事だった。ノイレジセイアの話によると、仕事量は多いが、バイト扱いの割りに給料がそこそこでしかも日給にして貰える。今高木社長が提案したプロデューサーの仕事の給料は事務処理のバイトよりさらに高いが、それは普通なサラリーマンへの逆戻りを意味する。

「今君、プロデューサーを普通なサラリーマンだと考えているな」「えっ？」

あつさり心を読まれて、響介が僅かに動揺した。その反応を見た高木社長は薄い笑みを浮かばせ、背を椅子に預けて語り始めた。

「それは勘違いだ。知つての通りここは芸能プロダクション、才能を持つ者をアイドルとして輝かせるのが仕事だ。自分の夢を抱き、ファンに夢を与えるために芸能界に身を投じた若者が多いが、その夢を叶えられるのはほんの一握り。だが、敗北した者の夢を受け継ぎ、それを礎にしてさらなる上を、トップアイドルの座を目指すのは、決してアイドル自分ひとりで出来ることではない」

「そこが、プロデューサーの仕事ですか」

「そうだ。アイドルを導き、アイドルの支えとなり、アイドルと共に勝ち進むのがプロデューサーだ」

「……」

「勿論綺麗事ばかりではない。アイドルのパートナーとして行動する以上、君にも退路はない。常に全力を出し切らないと、待っているのは一生の悔いを残して無様に敗北するだけ。そしてその時のプロデューサーは、アイドルと共に永遠の地獄へ落ちる」

「地獄、ですか」

怖い単語を呟く響介の顔は、どこかで嬉しそうに見えた。

「君を一目で見た時から、私はティンときたよ。君にはプロデューサーとしての素質がある。このまま腐らせるのが惜しいくらいにな。どうだ、やってみる気はないか？ 経験のなさは大した問題ではない。分らないことがあれば、律子君とブルースト君達に教えてもらえばいい」

「……一つだけ条件、出していいですか」

「言ってみてええ」

「今月の給料は、日給にして貰えませんか」

響介の言葉を聞いた高木社長は一瞬面食らった顔をして、すぐに大声を出して嬉しそうに笑った。

「あははははは！ まったく君という男は。そつだな……こつちからも一つの条件を出そう。それを達成できれば、今月の給料全額の前借を許可しよう」

「条件？」

「そつだ」

椅子から腰を上げて、高木社長は書類収納棚から一つのファイルを取り出して、響介に差し出した。

「これは？」

受け取ったファイルを開いて、中にあるのは髪の両側に可愛らしいリボンを結んだ女の子のプロフィールだった。記載によると、「天海春香」という名前らしい。

「見ての通り、天海春香君のプロフィールだ。天海春香君は我が事務所に在籍しているアイドルでね、半年前既にデビューしたが、人気がいまいち伸びてない」

「それで、どうして彼女のことを自分に？」

「私の条件というのはね、彼女を十日後のオーディションに一位の成績で合格させて欲しい。君の力でね」

「十日後か……」

自分にしか聞こえない声で、響介は呟いた。家賃の支払日は二週後、時間的には十分間に合う。

「因みに正式契約を結ぶ前だから、月給は大体これくらいだ」  
高木社長は電卓に数字を入力して響介に見せる。あのボロアパートの三か月分の家賃を払ってもまだお釣りが来る額だった。

「もちろん、天海春香君とのコンビも一時的なものだ。正式契約の後、君はうちのアイドル達からプロデューサーになりたいアイドルを選ぶ権利がある。だが、もし失敗した場合は……」

「全てはそこまで、ですか」

「そうだ」

「ふっ」

嬉しそうに口元を上げて、響介はファイルを閉じて高木社長の目を見据えた。そして高木社長も響介に応じるように、笑いながら彼を見返す。

「どうするかね？」

プロデューサーとしての経験はゼロ。

天海春香という少女の実力は知らないが、人気がいまいち伸びびてない所を見ると、ずば抜けた才能の持ち主というわけではなさそうだ。

そしてオーディションを勝ち抜く方法もよく知らない。

全体的に考えれば、かなり不利な状況だというのがわかる。その上に負けたら何も手に入らないし、今の住む場所も失ってしまう。

普通の人ならまずは断って事務処理の仕事を選ぶでしょうが、南部響介という男は違う。リスクが大きければ大きいほど、勝った時の満足感を味わいたくなる。

「答えは決まっていますよ」

それ故に、南部響介という男は常に自分らしく生きていける。

「分の悪い賭けは、嫌いじゃありません！」



**T r a c k 0 2 b u r n i n g r e d 前篇(後書き)**

そろそろ「IS バニシング・トルーパー」の方を書かないと…

…

「天海春香です。よろしくお願ひします。えっと……プロデューサーさん」

ソファから立ち上げて、髪に二つのリボンを結んだ可愛い少女・天海春香が明るい声で響介に元気よく挨拶した。

「朝会に言った通り、俺の名前は南部響介。十日後のオーディションまで、君の臨時プロデューサーを勤める。よろしくな、天海」  
「春香でいいですよ」

改めて自己紹介をした響介に、春香は呼び捨てることを要求した。

高木社長との話を終えて、朝会で社員達と顔合わせを済ませた後、響介は今回の担当アイドル・天海春香と二人きりでミーティングを行うことになった。

初めてのミーティング、主な目的は簡単な会話で互いのことをある程度理解して、初歩的な信頼関係を築くことだ。

「臨時、ですか？」

不思議そうな顔で、春香が首を傾けた。

プロデューサーというのは、言わばアイドル達の夢命を預かる職業。その理由からアイドルと長時間をかけて信頼関係を築く必要があるため、臨時プロデューサーのケースが少ない。

「まあ、試用期間だからな。正式採用された時、担当対象が変わるかもしれん」

もちろん、条件が達成できなかった場合の話をする必要はない。オーディションに向けて、無闇に彼女のストレスを増やしても意味がない。

「そうですね……じゃ、見限られないように頑張ります！」  
気合を入れるポーズをして、春香の自分のやる気をみせる。

「……まあ、当然君には頑張ってもらうが、後ろに俺が居ることも忘れるな。十日後のオーディション、何としても君に一位の成績を取ってもらおう」

「はい！」

プロフィールによれば、今の天海春香は17歳の高校二年生。顔は中々に可愛いし、スタイルのバランスも悪くない。派手な華やかさがないが、その代わりに親しみやすさと、周りの人を元気にできる積極的な雰囲気を持っている。

「……トップアイドルを目指す理由は、歌が好きだからか？」

「はい。私、子供の頃から歌とお菓子作りが大好きです！ 料理もそこそこ出来ますよ」

「そうか。年頃の女の子にしては、珍しく家庭的だな」

「えへへ、有難う御座います」

その肩まで伸ばした、やや外側へ跳ねている後ろ髪を掻きながら、彼女は照れくさそうに笑った。

「やる気は十分にあるし、ビジュアル面も悪くない、か……」  
アイドルの人気の問題は、様々な要素に左右される。だがその要素とやりに左右される前に、まずは自分のことを大勢な人間に知って貰わねばならない。

オーディションはそのための手段の中、かなり有効な一つとして存在する。オーディションを通過できれば、テレビ出演のチャンスを貰える。そこで自分の魅力をうまくアピールできれば、ファンの

数が増えるし、歌を歌って欲しい、CMに出演して欲しいと、仕事の依頼も来る。そして仕事によってファンの人数がさらに増えたら、さらに上へ目指せる。

つまり、オーディション 仕事 人気上昇 ワンランク上のオーディション。この循環をうまく回せば、ドップアイドルの完成も時間の問題。

無論、うまく回せばの話だが。

話題の初歩のオーディションに戻す。オーディションを通過したければ、まずは自分の実力を上げる必要がある。

そして実力は主に三方面から評価される。

歌が上手いかどうかのボーカル。

歌うときの肢体言語に表現力があるかどうかのダンス。

人の目を惹き付ける魅力があるかどうかのビジュアル。

そしてそれらの向上は、契約したスタジオでレッスンを受けることによって図れる。

以上、高木社長からの受け売りでした。

今の所、天海春香のビジュアルは特に問題ない。ややの地味さを否めないが、女の子としては十分かわいい部類に入っているし、舞台衣装と化粧を加えれば、更に華やかになるはず。

「とすると後は、ダンスとボーカル、か」

手帳を赤鉛筆で叩きながら、響介が考え込むが、突然至近距離に春香の顔が現れた。

「プロデューサーさん!？」

一人の思考に入った響介の顔を、春香が覗きこんで来た。

「……どうした？」

「もうどうしたじゃないですよ……急に黙り込むから、自分  
が何か失敗をしたんじゃないかって」

そう言った春香は、本気で心配しているような表情をしていた。

「そういう訳ではない。ちょっと今後の予定について考えただけ  
だ」

「そうですね？ でも、予定を考える前に、まだやり残してること  
がありますよ？」

「やり残していること？」

そんなことがあったっけ？と響介が春香の目を見る。すると春香  
は、興味津々な目をして、嬉しそうに頷いた。

「はい！ プロデューサーさんのこと、教えてください！」

「俺のことか……」

二十二歳、ギャンブラーで常に金欠。昨日まで無職だった。

碌でもない大人の典型的な見本である。目の前にいる可愛い少女  
に事実を教えるには、かなりの勇気がいる。

「普通に生活して来た一般人だよ。趣味はスポーツ観賞」

「サッカーや野球の観戦ですか？」

「あつ、ああ」

眩しい。

眩し過ぎてとても競馬だとは言えない。

「今は一人暮らしですか？」

「まあ、な」

変な植物が居るけど。

「ええ、プロデューサーさん結構ルックスいいのに、彼女がいな  
いんですか？」

ルックスだけでは、大人の女はついてきてくれないのさ。主の理由は貧乏だけだ。

「以前は居たが、ちょっと喧嘩のしたら、直ぐ実家のアメリカに帰った。それ以後は 会ってない」

「そうなの？ それで、プロデューサーさんは謝ったのかな？」

「……」

「もう、ダメですよ？ 例え別れるだとしても、ちゃんと謝らないと」

さすが女の子。こういう話をする時、目がキラキラしてる春香が発散しているオーラは、5歳年上の響介の反論を許さない。

「もう聞いてます？ そもそも女の子はいつだって……」

指を立てて、片手を腰に当てる。まるで説教している様に春香は乙女心を語り始めた。

あいつはさすがにもう“女の子”って歳じゃないだろう、と響介は思った。

「……とりあえず、今後十日間の予定について話すぞ」

変なスイッチが入ったみたいで、このままでな長引きしそうだから、響介は強引に話を切り替えた。

「あつ、はい！ でもプロデューサーさん、後はちゃんと謝ってくださいおよ？」

「前向きに検討を行い、善処する所存ですが、万が一の場合は達成できない可能性も有りますので、約束はしかねます」

「もう、何その政治家みたいな返事……」

「今はお前のことで精一杯だ。別のことを構ってる余裕はない」

「あわわ、私を言い訳に使いました！ よし、それなら、私がオーディションで一位を取ったら必ず謝ってくださいね」

「考えておく」

「もう、約束して下さいよー！」

経緯はちょっと微妙だが、これで春香のモチベーションが上がった。これで一応ミーティングの目的は達成されたことになる。

「もうこの時間か」

壁にある時計に目をやると、今は午前12時であることを理解した。

あれから春香と今後の予定に意見を交換したら、あっという間にお昼の時間になった。

「そろそろ昼飯の時間だな。春香はどうする？」

「あつ、私は弁当を持ってきました。プロデューサーさんは？」

「俺も一応……弁当を持ってきた」

宇宙の監察官が直々に作って下さった御握りだが。今となってはちゃんと確認しなかった事に少し後悔している。

「そうですか？ じゃ一緒に食べましょう！」

「あつ、構わんよ」

「えへへ、やった！」

二人はソファから立って、給湯室へ向かう。しかし、

「つぎやー！」

との悲鳴に近い声と同時に、響介は自分の背部に何か軽い物がぶつけられたのを感じた。

「す、すみません……プロデューサーさん。足がテーブルの脚に引っ掛けて……」

体を動かさずに頭を回して後ろを見てみると、響介の背部にはバランスを崩して、申し訳なさそうな顔をしている春香が抱き付いていた。

どうやら足がテーブルに引っ掛けて、バランスが崩れた所、響介

の背中に倒れたらしい。

「なるほど。ドジだった、と」

「変なことを手帳に書き込まないでくださいよ！ プロデューサーさん！」

「よつ、新入り。飯か？」

「あつ、春香さんだ！」

談話室から出てくると、事務員の音無小鳥が居ないことに気付いた。ご飯を食べに行ったのだろう。給湯室に行くと、既にテーブルを囲んでいる先客が二人ほど居た。

片方は黒いウェーブヘアの垂れ目男だ。座っただけでも分かるほど、背がかなり高い。朝会で挨拶した時に聞いた紹介によると、名前はクロウ・ブルースト。響介と同じ、プロデューサーとして765プロで働いている。

もう一人は、髪を両方に結い上げた女の子だ。春香より2〜3歳ほど幼く見えるが、中々しっかりした雰囲気を持っている。名前は高槻やよい。クロウ・ブルーストの担当アイドルである。

この時間で給湯室にいるなら、理由は大体昼食を撮るためであるが、ふたりの前にあるものを見る限りではちよつと頷き難い。

高槻やよいの方はまだいい。小さい弁当箱の中にはもやし炒めとご飯しかないが、おかずと米がある以上、立派な弁当だ。

しかしクロウ・ブルーストの方はあまりにも惨めだ。

ひたすら紙カップで水道水を飲んでる。そして時折ポケットから小さな調味料ビンを取り出して、その中にある白い粉をカップにふりかける。

「何だ？それは」

その調味料ビンに興味をそそられて、響介がクロウに問いかけた。

「砂糖だよ。金がないからね、昼食は砂糖水で済ませている」

「プロデューサーさん……分かりました、弁当をすこし分けてあげますね！」

クロウの言葉を聴いて、やよい弁当箱の蓋にもやしとご飯を乗せる。

「おおお、さすが天使やよい！ 女嫌いの俺でも、天使が相手じゃ仕方ない！」

自分よりかなり年下の女の子から施しを受けて、大喜びしているクロウだった。もっとも、響介も他人のことを言えないが。

「プロデューサーさん、こっちに座って」

「ああ、サンキュー」

クロウと対向して春香の隣に腰をかけて、響介はノイレジセイアが造った弁当を出して、外面に包んでいる新聞紙を剥す。

「ふつう……だな。一体どうやって作ったんだ……？」

中には綺麗な三角形をしているお握り四つが並んでいた。それを見て、響介が小さな声で呟く。中身を確認すると、やはりというか、具なしだった。

「プロデューサーさんのお握り、形が綺麗ですね。自分で作ったのですか？」

「まあな」

実は家にいる変な植物が作ったとか、言えない。

「へえ、新入りは自分で料理するのか、凄いな」

割り箸でやよいから貰ったもやしを摘みながら、クロウは感心したような声を上げた。

「ブルーストも一個どうだ？さすがに四個は食べ切れん」

「おつ、悪いな。じゃ、一個だけ。それと、俺のことはクロウでいいぜ」

「わかった。俺のことも響介でいい」

「了解！じゃ、頂きます！」

ぱくつと響介から貰ったお握りを一口噛んで、クロウはもぐもぐと咀嚼する。

「特に問題なし、か」

「……何か言いました？ プロデューサーさん」

お握りを食べてるクロウを観察する響介の呟きを、春香が僅かに聞き取れた。

「いや、何もなし」

「……うっ、うおおー！」

突然、クロウが素頓狂な声を上げて、目を大きくして手の中に残っている半分のお握りを凝視する。

「っ！！ やはり何かが『うっ、美味しい！』……はっ？」

「美味しい、美味いぞ！ 何この味！ 爽やかな口触りと奥深い味付けと間に揺れながらも、美味しいという支点はぶれない。このお握りに、太極の真理と見た！ こんな美味しいお握りを作れるとは、響介お前は一体何者だ……」

上半身を乗り出して、クロウは響介に迫り寄る。

「て、適当に作ったただけだ」

「よし、俺の砂糖をやるから、残りのお握りも寄越せ！」

「その取引、おかしくないか？」

「なら、このもやしもやるから！」

「断る」

「あはは、二人はすっかり仲良しですね」  
「そうですね」

大の男二人が食べものに巡って醜い争いをしているのを見ながら、少女二人は和やかに食事を進んでいた。

「春香さんの弁当は自分が作ったのですか？」

「はい！」

春香が出した弁当はいかにも女の子って感じがする。量は控えめだが、種類が多い。丁寧に詰め込まれていて、中々カラフルに見える。さすがに自分から料理得意と言っただけのことはある。

「でも、やよいちゃんはそれだけじゃ足りないでしょ？ ミートボールあげるよ」

「うわあ〜！ありがとうございます！」

自分のご飯の上に乗せられた美味しそうなミートボールを見て、やよいは嬉しそうに笑いながら礼を言う。そしてやよいの笑顔を見た春香もくすくすと笑い出した。

「午後の仕事も頑張ってね」

「はい〜！」

「おつ、いつも悪いな春香ちゃん。俺ももう少し余裕があれば、やよいの食事を何とかしたい所だが……」

響介との交渉が失敗したクロウも、手をやよいの頭の上に置いて春香に礼を言った。

「だめですよ、プロデューサーさん。まずはプロデューサーさん自分の食事をなんとかしないと、倒れちゃいます!!」

「あはは、こりゃ一本取られたな」

やよいに痛い所を突かれて、言い返せないクロウは誤魔化すように笑うが、そういう所を見ると、二人の関係はまるで兄妹のように感じる。

妹にもやしを分けてもらう兄の方はかなりの甲斐性なしって感じ

がしなくもないが、響介も他人のことを言える立場ではない。

「うん？ どうした」

響介の微妙に暖かい視線に気づいたクロウは、その視線の意味を聞く。

「いや、まるで兄のようだな、と思ったただけだ」

「俺が？ あはは、やよいの家族は六人も居るんだ。さすがに俺まで混ぜて貰う訳にも行かねえよ」

「遠慮することないのに。今度まだご飯食べに来てくださいよ」

成る程。やよいも含めて七人の家庭、そしてそのもやしだらけの弁当。大体の事情を響介は察した。家庭の経済状況はそう芳しくないということだろう。

「よし！ ご飯も食べたし、午後の仕事もがんばりますよ！」

「やよいはいつも元気だね」

手早く弁当箱を片付けて、やる気満タンになったやよいに、まだ食事中の春香が羨ましそうに見てた。

「はい！ 妹と弟達の生活がかかってますから！」

「偉いぞやよい。今月の給料が入ったら焼肉に連れててやるよ」

手を拭いて、クロウも椅子から立ち上がる。やよいを仕事現場までに連れて行くだろう。

「わい！ やった！ じゃ、失礼しますね、春香さんと、えっと、南部のお兄さん」

「行ってらっしゃい！」

「ああ、まだ後でな」

別れの挨拶して、クロウとやよいは給湯室から出て行った。

「……中々元気な子だな」

二人が出て行った後、響介は素直に感想を口にした。

「やよいは凄いい子ですよ。家族のために此処で働いてますから。だから何事も一生懸命になれるのでしょ」

言葉が後半になると、春香は声が呟くように小さくなり、顔もやや曇らせたように見えた。

「……」

横目でそれを気付いた響介は、黙ってお握りを咀嚼することにした。

午後は予定通りスタジオへ行って、春香の実力を把握するために歌とダンスを一通り見せてもらった後、そのままレッスンを受けさせた。そしてレッスンの後に会社に帰って報告を済ませて、春香と一緒に退勤した。春香も電車通勤だが、響介とは方向が逆だったので、駅で別れることにした。

「それで、あの天海春香って娘はどうだったかね」

アパートに戻って、Tシャツとトランクス姿でベッドに腰をかけてカップ麺を啜っている響介に、相変わらず紙カップに根を下ろしているノイレジセイアが質問した。

別に特に説明してないはずだが、ノイレジセイアは響介がプロデューサーになったことを知っていた。やはり植物による情報ネットワークのお陰だろうか。

「……ダンスはちょっと苦手と言っか、ドジってミスする事が多いが、下手という訳ではないし、ボーカルも悪くない」

「……？」

響介の言い方に、ノイレジセイアは含みのあるように感じた。

「しかしもし俺がオーディションの審査員なら、春香を選ばない

な

「なぜだ？ 実力は悪くないのだろう？」

「彼女の問題は、実力以外のところにあるからさ」

空になったカップをゴミ箱に投げ込んで、響介は口を拭いて携帯を取って操作する。

「ところで」

響介が通信ボタンを押す前に、ノイレジセイアは口を開けた。

「何だ？」

「頼みがある。砂糖と蜂蜜を調達して欲しい」

「砂糖と蜂蜜？ なぜだ？」

砂糖という単語を聞いて、響介が真っ先に思い出したのはクロウが持っていた調味料瓶だった。

「助手を作るうかと」

「はっ？ 繁殖でもするのか？」

「いや、この場合は分離というべきだな」

「……どっちにしる金がない」

「ちっ、貧乏くせえ」

「何か言った？」

「いえ、別に」

明らかに舌打をしたが、今は用事があるので追究しないことにした。携帯の電話帳ページを巡って、響介は以前の同僚の名前を探しだして、通信ボタンを押した。

三回ほどコール音が響いた後、電話から陽気な男声が響いた。

「はいはい、真宮寺です！」

「祐か？ 俺だ」

「オレオレ詐欺なら、お断りするぜ？」

番号表示で既に分ってるはずなのに、わざと惚けてるなら、それ

相応のカードを出すまでだ、と響介が決める。

「……お前が女子更衣室を覗いた証拠を所有している南部響介だ」  
「OK、響介さん。この私めごと真宮寺祐に、何か御用でも？」  
まるでホストの様な甘い声だが、同性だとただキモイだけ。

真宮寺祐、それは以前響介がカーレーサーをやつてゐる時に、チームの整備班に居た少年の名前。ふたりはギャンブルという共通の趣味を持つてゐるため、よく一緒にゐるんでいた。

「頼みがある」

「頼み？」

携帯を握つたままベッドに倒れこむと、壁に貼つてゐる写真が響介の目に入る。

赤いレーシングカーに寄り掛かっている響介、バンダナをつけている少年、そして金髪のポニーテールしているレースクイーンの女性の三人が映つてゐる写真だった。

「……ああ、頼みだ」

手を振って、別れを惜しむ人。手を握り合って、再会を喜ぶ人。空港の日常風景である。

そんな光景の中、一人の男が人波を掻き分けて、出口へ向う。スーツケースを持って、白いジャケットを着ているその男は燃えるような赤い髪をしている。

男前の顔にかけている幅の細いサングラスの奥にある瞳から放つ鋭い視線が、すれ違う女性達に振り返らせる。

出口から出て、タクシー乗り場にてタクシーに乗り込む。車がゆっくりと走り出した後、サングラスを外して外の風景を眺めると、その懐かしそうな視線で男の厳しい表情が幾分が柔くなったように見えた。

ポケットから出した手帳を開くと、中には古い写真一枚が挟んでいた。写真の中には怒った顔をしている赤髪少年と、無愛想に目を逸らした、黒髪の先端に金メッシュをいれた少年と、少年ふたりより三、四歳年下に見えるが、黒髪の先端に赤メッシュを入れたポニーテール少女が映っていた。

「やっと帰れたな。首を洗って待ってるよ……響介！」

午前十時、ボーカルレッスンスタジオの休憩室で、響介は腕を組んで壁に寄り掛かっていた。

ガラス窓の向こうで、自分の担当アイドルである天海春香はまだボーカルの先生と練習を励んでいる。

今日は入社してから九日目、オーディションはとうとう明日まで迫って来ている。春香のコンディションはほぼ整え、通過なら問題ないだろうが……一位を確実に取れるかどうかと聞かれると、響介は頭を縦に振れない。

(あと一押し足りない、か)

「おはようございます、南部さん」

頭の中で春香の仕上げ計画を考えている最中に、隣から挨拶の声を聞こえた。視線を向けると、いつの間にか、蒼いロングヘアの女の子が立っていた。

華奢な肢体に飾り気のない白いシャツと黒いズボンを纏い、素っ気無い表情をしているその女の子は765プロ在籍アイドルの一人、如月千早だった。

「ああ、如月か。おはよう」

挨拶を返した後、千早は腕を抱えて響介の隣に立ち、無言に春香のレッスン風景を見学し始めた。多分この後のレッスン時間を予約したから、一歩早くスタジオに来たんだろう。

「……………」

耳を澄まして、千早はさっそく春香の歌声の方に集中した。邪魔はすべきではないとは分かっているが、そのあまりにも真剣な表情を見て、響介は意見を尋ねて見ることにした。

「春香の歌……どう思う?」

「……………どうして、私に聞くんですか?」

しばらくの無反応の後、千早は目を開けて響介を見てそう言った。

「春香の歌を真剣に聞いた如月の意見が欲しい。それだけだ」

千早の不思議そうな視線を、響介は至って真面目な目で見返す。

そして響介の言葉を聞いた千早は、顔をうつぶせて口を動かした。

「上手く表現できませんが、何か……春香としての何かが足りないような気がします」

「率直な言い方だな」

「すみません。ですが歌に関しては妥協したくありません」

「いや、誤解しないでくれ、別に怒ってない。むしろ如月みたいなストリートな子の方が話しやすいと思っている」

「そ、そうですか」

簡潔に返事を返した千早は顔を逸らして、二人は再び黙り込み、ガラス越しに伝わってくる春香の歌声だけが休憩室に響く。

「お待たせ……あつ、千早ちゃん来てたんだ」

しばらくして、レッスン室から出てきた春香は千早の存在に気づき、声をかけた。

「千早ちゃんはこれからレッスン？」

「あつ、はい。……では、失礼します」

春香に返事を返した後響介に一礼して、千早はその長い髪を揺らしてレッスン室へ入って行った。

「じゃプロデューサーさん、着替えてきますからちょっと待ってね」

レッスン中ではエアコンつけてもよく汗をかくので、春香はピンク色のジャージを着ている。

「ああ、行って来い。俺はここで持つてる」

「はい！」

春香が出ていた後、響介は視線をガラスドアの向こうに立っている千早に向けた。

「さて、お手並み拝見させてもらおう」

独り言のように、小声でそう呟いた。さっき交わした簡単な会話で、響介は千早に対する興味が湧いて来た。

視線を気付いた千早は一瞬響介に意外の目を向けた後、すぐ無表情な顔に戻って、レッスンの先生と向き合った。

少し話をした後、先生指示に従い千早は発声練習の準備を始める。

「すっ」

呼吸のリズムを整え心の雑念を排除し、意志を声を発することに集中した後、千早はゆっくりと歌い出す。

「……！！」

春香とまるで感じが違う歌声だった。あふれる透明感の中に穏やかな力強さを感じる。まるで綺麗な海の中から、果てしない青空を見上げるような光景が思い浮かぶ。声一つでそこまで感性を引き出されるのは響介にとって、いままでなかった経験だった。だが……（……どこか、冷たい……？）

「凄いでしょ……千早ちゃんの歌」

いつの間にか、私服に着替えた春香は休憩室に戻ってきた。

しかし響介の横で羨むような表情してる春香の目は、どこか寂しそうに見えた。

「……移動するぞ。近くに知り合いの店があるし、そこで少し休

憩しよう。甘いものくらい奢ってやる」

「やった！でも、プロデューサーさんって金欠中なんじゃ……」

「子供が大人にそういう気を遣うな。心配はいらん」

「もう〜！ もう子供じゃないですよ！」

怒ったように頬を小さく膨らませて、春香は先に出て行った響介の後を追ってスタジオを後にした。ビルから出て十分程歩いて、二人は道端にある小さな喫茶店の前に立つ。

アンティーク風の喫茶店、“オルケストル”である。

「いらっしやいませ〜！ってあら、あららら、響介じゃない〜！」

店に入ると、ウェイトレスが二人を出迎えた。そして明るい挨拶声とともに、ウェイトレスはまるで愛おしい人の腕の中に飛び込むように響介へ飛び付いて来た。

「どけっ」

「くわっ！！」

容赦ない回転キックでウェイトレスを蹴り飛ばした後その死体を踏み越えて店の奥へ進むと、響介はカウンターの中にいるマスターらしき人物に声をかけられた。

「響介か。ツケを払いに来た……って訳じゃなさそうだな。女子高生を誘拐したのか？」

「……っ！」

洪い男声を発した人物に目を向けると、春香は自分の驚異を隠すために手で口を押さえた。そのマスターらしき人物はなんと、骸骨のマスクを被っている。

「馬鹿言え。仕事関係だよ」

「そうか？ お前みたいな奴と仕事とは言え、一緒に居ても逃げ

出さない女がいるとはな」

「エイゼルに言われたくない」

お昼までまだ少し早い時間だから、客は少ない。春香を連れて奥の席に座り、メニューを開いて彼女に差し出す。

「もう響介ってば乱暴なんだから……でもそついう所がス・テ・キ……きゃっ！」

さっきのウェイトレスは既に復活を果たして再び響介達に寄ってきた。伝票とボールペンを持っている所を見ると、一応仕事をしに来たらしい。

「エスプレッソ一つだ。春香は？ 遠慮は要らんぞ」

響介はまったく相手をする事なく、注文だけを伝えた。

「えつと、じゃ……今日のお勧めケーキセット、飲み物は紅茶で目の前にいるハイテンションのウェイトレス、そしてカウンターの中にいる骸骨マスターに戸惑いつつ、春香も自分の注文を決めた。

「酷い！ やっぱり若い子がいいのね！ アタシはもう捨てる気なのね！」

「カツエ」

「はい〜エスプレッソに紅茶のケーキセットね？ 少々お待ちを〜」

骸骨マスターの穏やかだが威圧感満点な一声で、ウェイトレスは大人しく響介たちの注文を復唱した後カウンターに向った。わざとらしい演技をしながらちゃんと注文を取っていたとは、中々器用なやつ。

「ねえ、プロデューサーさんはあのウェイトレスさんとどういう

関係なんですか？　ちよつとハスキーボイスですけど、凄い美人じゃないですか」

「ロングスカートを揺らしながら離れていくウエイトレスの後姿を見て、春香は押し殺したような声で響介に聞いた。

確かに、体の線が細いが、全体的に大人の色気が出している綺麗な人だった。しかし春香に聞かれた響介は微妙に苦い表情をした。

「カツツエ・コトルノス……三十を超えた男だぞ」

「ええええ！……！」

驚きのあまりに大声を出して、もう一度カツツエに視線を向けると彼女……いや、彼は悪戯を成功した子供のように微笑んで、指を口に当てて春香にウインクをした。

「あんな綺麗な人が男だなんて……がっくり」

確かに胸はないが、目測でもウエストが自分より細そうに見えて、女の子としてのプライスが軽く喪失した春香だった。

「美味しい！　すっごく美味しいですよ！　プロデューサーさん！」

二人の注文が運び込まれ、勧められたアップルパイを一口食べた後の春香は、絶賛の声を上げた。

「それは何よりだな」

エスプレッソを一口含んで、響介は本題を切り出す。

「……オーディションはいよいよ明日だが、一位を取る準備ができたか？」

「うん……ベストの尽くしますよ？」

「なぜ疑問系なんだ。目指すの是一位だけだぞ」

「分かっていますよ。だからベストを尽くすって言ったじゃないですか」

「……一位を必ず取ってやる、とは言わない、か」  
コーヒーカップを置いて、響介の目がやや厳しくなり、それを氣付いた春香もフォークを動かす手を止めて、再び寂しそうな目をした。

「そんなの、約束できませんよ」

「なぜだ？」

「私、レッスンちゃんと頑張ったじゃないですか。仕事真面目にやっただじゃないですか」

「分かっている。この九日間でお前を見てきた俺はそれをちゃんと分かっている」

「だから本番もベストを尽くせば、それでいいじゃないですか。結果がどうなるかなんて、予測できるわけがありませんよ」

「予測の話じゃない。君自身の心構えの問題だ」

「……何か言いたいんですか？ プロデューサーは」  
顔をうつ伏せた春香の声に、僅かなイラつきが交じっていた。

「はつきり聞こう。春香は、本気でトップアイドルを狙う気がするのか？」

「……どうして？」

「レッスンも仕事もちゃんとこなした。だがそれもそれまでだ。お前はただ与えられた目標をクリアしようとしていただけだ」

「その何がいけないんですか？」

「自分を抑えるのをよせ。如月の歌を聞いたお前なら気付いたはずだ」

「何をですか？」

「……お前は、お前だけの歌を歌っていない」

二人の間、しばらくの沈黙が流れる。

エイゼルは黙ってコップを磨いて、カツツエは好奇そうな視線でこつちをちらちら見ている。

「分かっていますよ。今の私は無難に自分の仕事をクリアしようとしているだけだって」

「なら、なぜもつと上を目指さない」

「そんなの、無理ですよ！ 私なんて！」

大声を出して、春香の肩が震え始めた。しかし響介はさらに鋭い言葉を彼女にかける。

「アイドルも人間だ、弱気な時もあることくらい理解できる。だがお前はそれを隠しきれずに、お前を見た人間に感じ取られてしまう。審査員もファンもお前を選ばないのはそれが原因だと、俺は思っている」

「だって私は！ 千早ちゃんみたいに歌が上手いわけでも、真みにたいにダンスが上手いわけでもありません！ 歌が好きだけで、夢も目的もないままどこまでも行けるわけじゃありませんよ！！」

「だが、その考えがお前自信を縛り付ける原因になっている」

「でもそれが現実なのよ！ 仕方ありませんよ！！」

「おい！ 待て春香っ！」

響介が手を伸ばしてひき止めようとしたとき、春香はすでに喫茶店を飛び出して、駅の方へ走って行った。

残ったのは、響介の指に落ちた僅かな雫。

「あらら、女の子を泣かして、悪い男ね響介は」

春香が走っていく姿を見て、カツツエが響介の方に近づいてきて話しかけた。

「……言い過ぎたか」

春香を問題と直面させるのが目的で話をしたが、少々やりすぎた。

「コーヒー代はツケにしといてくれ」

「まだか。結構溜まっているぞ」

伝票をカツツエに押し付けて、響介は店から出ようとしますが、カウンターの経過する時にエイゼルに呼び止められた。

「心配するな。明後日にまとめて払ってやる」

とだけ確信めいた口調で言い残して、響介もオルケストルを後にした。

響介と喧嘩して別かれて十二時間。

今は深夜、親たちはもう就寝したが、春香は自分の部屋のベッドで鬱々としていた。

幸い午後も大した予定がないので、響介と喧嘩した後そのまま帰宅した。

だが、響介の言葉が頭の中から消えない。

自分の問題くらい、響介に言われなくても理解していた。

しかしいままでずっと目を背けてきた。

ただ歌うことが好きで、自分の歌をもっと他の人に聞いて欲しくて、アイドルの道に進んだ。

でも情熱だけでは限界を感じた。才能の溢れる子が大勢に居るこのアイドル界、自分が自分の個性を確立できずに、息だけが詰まってしまう。

いつから、ただ与えられた仕事をこなせばいいと思うようになった？

いつから、上へ行く勇気を失った？

「一体どうすれば……」  
頭の中がぐちゃぐちゃの春香は、顔を枕に沈める。

「  
」  
突如に、携帯が鳴り始めた。

電話に出る気分じゃないから、無視することにしたが、いつまで経っても鳴り止まない。仕方なく手に取って、液晶ディスプレイを覗き込むと、

「プロデューサー、さん……？」

そこには、自分のプロデューサーの名が映っていた。

春香はさらに混乱する。

なんのために電話をして来たんだろう？

春香に謝るために？ それはない。自分が正しいと思ったときに謝ったりするような人間ではない、あの人は。

なら……パートナー関係の解消を告げるために？

きっとそうだ。自分みたいなダメな子に、愛想尽きたのだろう。

無理もない。美希たちみたいな才能あふれて、個性も強い子と組めば、プロデューサーさんもきっともっと楽だったのだろう。

「  
」

そう思っ、春香は赤いボタンを押して響介からの電話を切った。しかし部屋が静かになった途端、携帯から再びメールの着信音が鳴った。

『窓の外を見る』

響介からのメールに、それだけが書いてあった。

「何だろう……？」

ベッドから身を起こして、カーテンをかき分けて窓の外を覗いてみる。

「……プロデューサーさん?!」  
家の前に、赤いレーシングカーに背を寄りかかって、春香に向かって携帯を振っている響介が居た。

「あの……プロデューサーさん？」

「何だ？」

「私を、どこへ連れて行くつもりですか？」

「すぐに分かる」

今の春香は、響介が運転中の車の助手席に座っている。

横にいる響介の顔を覗いてみる。

いつものポーカーフェイスだ。今日勝手に飛び出したことにまだ怒っているのかどうか、判断し難い。

混沌とした頭を冷やすために、夜のドライブに連れて行ってやる  
つていう響介の誘いに乗ってみたが、今にして思えば軽率だったの  
かもしれない。春香の家は市街中心部からかなり離れている。真っ  
赤なレーシングカーが家の前の公道に沿ってしばらく進むと、すぐ  
に峠への道を登り始めた。

「まままさか、ゆ、誘拐？」

頭の中に、エイゼルが冗談に言った言葉が過ぎる。

「……なに馬鹿なことを。それよりしっかり掴まっている。少し  
飛ばすぞ」

「えっ、飛ばすって何を……ってうきやあああああ!?!」

返事を聞く前に、答えを身を持って体験した。峠道に入った途端、  
響介がレバーを引いて力いっぱいアクセル（あの人のことではあり

ません)を踏む。すると、レーシングカーは暴れだしたじゃじゃ馬のように暴走し始めた。

「ちよちよちよちよつと！ スピードを落としてください！ スピードを！！」

「踏み込みの速度なら負けん！」

ぶつける寸前のギリギリなタイミングでブレーキを踏み、ハンドルを切ってドリフトを決める。

「いやいやいや誰にですか！ それより少しスピードを落としてよー！」

「多少古臭いエンジンだが、加速力は関係ない！！！」  
コーナー後の直線道が入った途端、再び荒っぽい加速を始める。

「どんな道だろうと、突き貫くのみ！」

「私の話を聞いて下さいよー！！！」

ハンドルを握った響介に自分の言葉が届かないことを悟り、春香は必死に安全ベルトにしがみつくしかなかった。

「ふん、やはり腕が鈍ったか。三分間オーバーとは」

「何か『ふん、やはり腕が鈍ったか』ですか！ 死ぬかと思つてましたよー！！！」

山頂の駐車場で、車から降りて自分の走りに不満を表した響介に、泣きを混じった声で春香は突っ込みを入れた。

「そうか。確かに初心者にはちよつとキツイかもしれんな」

「ちよつとじゃないですよ！ 地獄でしたよ！ 最終地獄ジユデッ力でしたよー！！！」

ふらふたとした足運びで、春香はペンチに座って心臓を落ち着か

せる。

やはり山頂の夜景は格別で星もよく見えるが、先ほどの臨死体験の感触がまだ抜けてない春香は、まだ落ち着いて堪能できない。

「すまん。でも春香を連れてきたのは、お話があるからだ」

「お話？」

それを聞いた途端、春香の顔が再び曇った。

「パートナー関係解消……ですか？」

「違う」

「えっ？」

意外な返事に、春香は顔を上げて目の前に居る響介の顔を見上げる。そのいつまでも変わらないポーカーフェイスを。

「今日は確かに言い過ぎた。俺はお前の気持ちを十分に考慮できなかった。だが問題は間違っていないと思っている。だから、どうすれば春香の問題を解決できるか、ずっと考えていた」

「私の……」

「ああ。ちよつとこっちに来てくれ」

春香の手を引いて、響介は駐車場の入り口まで歩いて、そこに立っている大きな広告板を指した。

「これは……」

広告板表面の上方には、綺麗な茶髪女性一人の写真がプリントされ、右下にはその女性の名前が書かれていた。

「ネージユ・ハウゼン……？」

個人コンサートの宣伝広告だった。しかも何年前のもので、塗料のあちこちが剥がれ落ちている。こんな辺鄙なところに宣伝広告するなんて、予算にかなりの余裕がある、つまりかなりの売れっ子で

あつたのが窺える。

「それだけじゃない。来る途中に同じ広告板が何個もあつた。全部この女の写真だ。この女がアイドルだったって事以外を知らないが、俺が夜の走りにはまつた頃は、毎晩ここでこの女の写真見ていた」

「……だから？」

突然な話題に、春香は響介の意図を理解できなかった。

「春香は自分に夢も目的もないと言つたな」

「……」

「なら、俺がお前に夢、いや、野望を与えてやる」

「野望？」

「そうだ、野望だ。一年以内に、この峠道にあるこの女の写真を、お前の写真に換える」

「私の……写真？」

「ああ、同じ個人コンサートの宣伝でな。それが達成できたら、次は市内の繁華街のビルにお前の写真に貼れ」

「……」

「目標ならいくらでもある。お前はただ欲張り続けばいい」

「よく、ばり……」

虚しげな表情で、春香は顔を上げて満天の星空を見上げる。

大人しくて気が利く。それが周囲からの評価だった。厳しい親にそう教育されてきた春香は、自分の本心を殺すことに慣れていた。

無理かもしれない。断られるかもしれない。笑われるかもしれない。

普通に生活するなら、それでよかったかもしれない。

だが、アイドルとしての自分、本当の天海春香はどんな女の子？  
この問題の答えを知りたいという気持ちだが、春香の中で膨らみ始めた。

「そうだ。そしてお前の欲を現実にするまでの道は、一人じゃない。安心しろ、欲を力にできる欲張りには、誰にも負けない」

彼女は、天海春香はアイドルだ。無欲など、致命的すぎる。

そもそも欲も無い人間が、上を目指せるわけが無い。

それを、響介はこの九日の観察で気付いた。

欲しいものをすべて手に入れ、邪魔者をすべて力尽くで振り払う。

「実力なら、春香は十分にある」

欠けていた鍵は、“欲”だけ。

「その欲を満たすために、俺が」

我々が、居る。

だから、その心の奥底に潜んでいるものを……！

「……っ！」

自分の中に誰かが囁いた気がして、響介の脳に一瞬だけ頭痛が走った。

「プロデューサーさん」

「何だ？」

頭痛が一瞬で収まり、響介は自分呼びかけた春香に返事をして

彼女に目を向ける。

そして響介の目に入ってきたの一片の迷いもない、強い意志を宿した目だった。

「……私、一位が欲しい！」

「素晴らしい、実に素晴らしいぞ！ このアイドル界では、アイドル達が絶えずに競い合い、常に進化し続ける！ まさに永遠に闘争する、理想の世界だ！ 故に俺は賄賂贖身などという腐敗を断じて許さアアア！ アイドル達よ、ともに阿修羅となるろぞ！」

十四時間ほど飛ばして、妙にハイテンションな特別審査員のおっさんからの挨拶によって、響介の家賃の運命を決めるオーディションが幕を開けた。

登場を控えて、今の響介と春香は舞台の袖にて待機している。

「準備はいいか？ 春香」

夜のドライブのせいで睡眠不足じゃないかと心の中では心配していたが、当人の春香は意地悪そうな笑顔を響介に見せた。

「はい！ 見ててくださいね、プロデューサーさん。必ず家賃を勝ち取ってあげますから！」

「……知ってたのか」

「はい、小鳥さんから聞きました。でも悪いですけど、私は私自身のために歌いますから、貧乏プロデューサーさんの家賃なんて、ただのついでです」

事務員の音無小鳥も知らないはずだが、まさか盗聴でもされてたのか。

「ふん、生意気だな」

欲を出すことの覚えた春香は、全体的な雰囲気が変わった。この変化に気付いた響介は、口元に薄い笑みを浮かばせる。

「ではまずエントリーナンバー1番、天海春香さん！ どうぞ！」  
ステージの方から司会の呼び声が聞こえた。

「じゃ、行ってきます！」

「ああ、行って来い」

手を振って、春香はステージの方へ走り出す。

審査員の注目に、スポットライトの照明。そして、自分を見つめているプロデューサーさんの視線。

臆すことは何もない。なぜなら、欲しいものがあるから。

髪に結っているリボンを揺らしながら、手を振りかざす。

「聞いてください！ 私の歌！！」

自信あふれた顔に、小悪魔のような黒い笑みが浮かぶ。

ごく自然な表情一つだが、その艶っぽい笑みにはこの場の全員の心を飲み込むほどの魅力が、確かにあった。

「『I WANT』！！」

「うむ。まず一つめ、だな」

同時刻、響介のボロアパート。誰もいない部屋の中、ノイレジセ  
イアが呟く。

「これで我が願望が第一歩を踏み出したことになる。やはり持つべきものは使える貧乏人。そろそろ、お前にも動いてもらうだぞ」

「はい。分かりました、ですの」  
誰も居ない部屋の中、人の声が響いた。  
どこに居るのかも分からないが、幼い女の子の儂げな声が確かに、  
あった。

「あはは、やはり私の目に狂いはなかったようだな、南部君」  
「やるじゃないですか、南部さん！」

「春香おめでとう！ これで明日からはきつと大量な仕事殺到に  
違いないね！」

完璧に実力を出し切った演出で、春香はオーディションの一位を  
見事に収まった。オーディションの後に本番のテレビ演出して、そ  
して関連スタッフの挨拶を済ませて事務所に戻ったとき、既に夜の  
七時。

帰ってきた二人に待っていたのは、765プロの皆さんからの称  
賛の嵐。さらに、高木社長が出したポケットマネーで、今は菓子と  
ジュースで簡単な祝いパーティーを開いている。

「うひょ！！ 腹いっぱい食わせてもらうぜ！」

「クロウさん！ 僕の分には手を出さないで下さい！」

中にはみつともないことをやっている大人もいるようだが、気に  
しない。

「プロデューサーさんは缶コーヒーだけでいいんですか？」

「ああ、これでいいよ」

「そうですか」

隅の方で缶コーヒーを握っている響介に、春香が寄ってきて話し  
かけた。

「どころで、プロデューサーさん？」

「何だ？」

「明日から、私達のパートナー関係は消えちゃっていますね」

「そうだな」

「次は誰をプロデューサーするか、もう決めましたか？」

「……いや、まだだ」

春香のプロデューサーを続けるのも悪くないが、なんとなくこの場で言い切りたくなかった。

「そうですか……私のプロデューサーを続けるとは言ってくれないんですか」

「……っ！」

突然にネクタイが引つ張られて、響介は前へ屈んだ。すると響介のネクタイを引つ張った張本人である春香は、響介の耳元に自分の口を寄せて、小声で囁いた。

「私から逃げようとしても無駄ですよ？ 私が欲しいものは、すべて手に入れてやるんだから。例え、奪ってでもね」

次の瞬間、響介は自分の頬に暖かくて柔らかい感触を感じた。

「……っ 春香！」

「くすくすくす……覚悟してくださいね、プロデューサーさん！」  
悪戯に成功した子供のように笑いながら、春香は皆の所へ逃げた。

「……やれやれ。こつも変わるとはな」

「おい響介！ お前こつち来いよ！」

「ああ、今行く」

クロウの呼び声に応じて、響介は彼がいるテレビの前まで歩く。

「これを見るよ。今年一番有望な新人って言われてるアイドルだぜ？」

テレビのリモコンを操作してボリュームを上げて、クロウは画面の中で歌っているアイドルを指差す。

「一番、か」

アイドル界では上下関係が曖昧すぎる。絶好なチャンスさえ掴めばすぐ一気に売れるようになるし、逆にスキヤンダルの一つで引退に追い込まれることも珍しくない。しかし、一番だなんて言われている以上、それなりに実力があるはずだ。そう思って、響介は視線を画面に移るが……

「……かぐ、や?!」

画面の中で歌っている、髪の毛の先端に赤メッシュを入れたポニーテールの女の子に、響介は見覚えがあった。

Track 04 burning red 後篇(後書き)

次回予告

「貴様、こんなボロい所に住んでいるのか！ こんな環境で生活している貴様を倒しても意味がない！ 引越した引越し！」

「そんな食生活を送っている貴様を倒しても意味がない！ 明日から俺が弁当を作つてやる！」

「ところで、貴様は今どこに就職しているんだ？ 何！？ 芸能プロタクシオンだと！ なら歌には自信がある……これがな！ 俺の歌を聴け！！」

「……うるさいワカメですの」

突然に來襲する幼馴染と、いきなり現れた不思議系少女の連携攻撃。果たして響介は耐え切ることができるのだろうか。

次回、track 05 ICE GIRL 前編

「我と契約して、魔法アイドルになつてよ」

お楽しみに！

「おい転校生、ちょっと金を貸してくれ」  
教室の隅、机で呆然としている赤髪少年に、開いた手のひらを差し出す。

「今週のお小遣いはもうないよ……」  
唇を噛み締めて、赤髪少年は目を逸らしてシャーペンを握り締めて、小声でぼやく。

「……大体、この前の金もまだ返してくれてないじゃないか」

まだ小学生に見える赤髪少年は同年代の子供より彫りの深い顔立ちをしていて、鼻が高く肌も白い。

明らかにアジア人ではない外見を持っている。

「そうか、すまん。今度金入ったら返す」

「……なんでそんなに金が要るのかな？」

「カブト虫を飼う道具が欲しくて」

「カブト虫!？」

その単語に反応した赤髪少年は顔を向けてきた。

「ああ、俺の相棒、古鉄って名前の真つ赤な奴だ。このクラスの中では最強だぞ」

「いいな……」

赤髪少年の目から羨ましそうな視線が出てきた。

「見たいなら、一緒に来ないか？ カードゲームもあるし」

「いいの!？……あっ」

溜まり場に誘われて、一瞬嬉しそうに見えた赤髪少年は、すぐに

顔を曇らせた。

「……やっぱり行かない。僕が行っても皆が嫌がるだけだよ」

「何だそれは。お前そんなだから何時まで経ってもクラスに馴染めないぞ」

「でも、みんな僕のことを笑うし」

「気にしなきゃいいんだろうか」

「無理だよ……僕じゃ」

「……気に入らん。何故だ？ そんなに笑って欲しくないなら、正面から言えればいいじゃないか」

「正面から……？」

「そうだ。よしっ、今からお前を笑うやつを全員ぶん殴りに行くぞ」

「えええええ！ 話し合いじゃないの？」

「それで金のことはチャラにしてくれ」

「嫌だよ……！」

戸惑う赤髪少年の手を引いて、教室の出口に向う。

「文句言っていないで、早く行くぞ！ えっと……ブルマー」

「アルマーだよ！ それに僕はスパッツ派だからね！」

それが、赤髪少年とダチになったきっかけであった。それから、

「ブルマーお前牛乳飲まないの？ なら俺が貰うぞ」

「あつ、待て待て飲むから待て！ それと僕はアルマーだよ！」

小学校で一緒に給食を食べた時も。

「ブルマー！ 炎龍先生が来た！ 困頼むぞ！」

「嫌だよ！ それに俺はアルマーだよ！」

中学の時一緒に水泳部の更衣室を覗いた時も。

そして、高校の入学式の時も。

「やれやれ、高校も同じクラスか。腐れ縁だな」

「うるせい！ お前を倒すまで、逃げられてたまるか！」

「響介お兄様、誰ですか？ この人」

「ああっ、神夜には初対面だったな。一応紹介しておく。小学校からのクラスメイトの、アホセル・ブルマーだ」

「おい！！！ 何回言えば覚えるんだ！ 俺の名は……！！」

「アクセル・アルマーだああ！！！」

「……随分と懐かしい夢を見たな」

目を開けると、響介の視界に入ってきたのはヒビが入った汚い天井だった。

枕元の携帯を手に取って時間を確認すると、時間的に余裕はもうあまりないことに気付く。

「そろそろ起きるか……うん？」

身を起こそうとする時に、響介は違和感を感じた。

体の上から重みを感じる。そして布団が不自然な形で膨らんでいる。

まるで、自分以外の何かが入っているようだ。

「何だ？……っつてうわっ！」

中身を確かめようと布団を開けてみた途端に、小さな影が響介の腕の中に飛び込んできた。

「パパ！！」

突然に首の後ろに細い腕が回されて、響介は抱きしめられた。

幼い女の子の声が聞こえたのと一緒に、ナチュラルな甘い香りが

鼻に入ってくる。響介の皮膚に伝わってくるのは、滑らかな肌触り。

「だ、誰だ?!」

強引に正体不明な女の子を剥がして、肩を掴んで正面を向かせた。

「響介パパ……!」

「なっ……!」

目の前にいる糸一つ纏わぬ女の子に、響介は言葉を失った。

ルビーのような赤くて無邪気な瞳に、長くてさらさらな青い髪の毛、そして雪のように繊細で白い肌。見た目では普通に十歳前後の可愛い女の子に見えるが、響介はこの子の顔つきに見覚えがあった。

「エクっ、セレン……?!」

さすがに瓜二つって訳ではないが、この幼女の顔は自分と喧嘩中の恋人、エクセレンとよく似ている。

(そういえばこの子、俺をパパと呼んだが……まままさか!!  
いやいや、この子はどう見ても十歳以上、時間上では計算が合わない。だとすると……)

「うん?」

考え込む響介に、幼女は頬に指差して首を傾げる。

「……ノイレジセイアの仕業か!!」

最近の非常識な出来ことは、大体あいつが絡んでる。裸の幼女をベッドに置いて、響介はテーブルの上にある、紙カップの覗き込むが、

「なっ、に……!?!」

紙カップの中は既に何も無い、抜け殻だった。よく見ると、カップの下に書置きが残されていた。

お握りを作れるくらいなら、字を書くくらい簡単だろうと驚かない響介は、自分がすこしつづれで行ってることに気付かない。

『課長から呼び出しが掛かったので、しばらく本部の方に顔を出す。ノイレジセイア』

本部って……組織があったのか。しかも課長って、下っ端だったのか。

『P・S：今日のおにぎりは台所に置いてある』

気が利くな……って違う。なぜあの幼女のことについては何も書いてないんだ！

「……うん？ 最後の方にもう少し続きがあるな」

『P・S・2：アルフィミイはお前とエクセレン・ブラウニングの遺伝子で作った、我々の同族だ。我がいない間に代わりを勤める』

「大事なことは最初に書けよ！！ おのれノイレジセイア！ 許さんぞ！！」

力いっぱいノイレジセイアの書置きを細かく破って、テーブルにぶちまける。

「勝手なことを……大体子供の世話をやる時間など！！」

「パパ、私のこと嫌いなんです……？」

何時の間にか、女の子は響介の側に寄ってきて、彼の手を掴んで涙目で見上げる。

「……」

さすがに罪のない子供に八つ当たりはよくない。というかそろそろ準備しないと遅刻しそうだ。状況を整理した後、響介は自分を落ち着かせて、このアルフィミイという名の子の頭に手を置いた。

「大声出してすまなかつたな、別にお前のことを怒ってる訳ではない。俺はこれから仕事だが、悪いが一人で留守番できるか？」

さすがに、765プロにこの子を連れて行くわけにはいかない。

そもそも関係の説明もできない。

「分かりましたですの」

響介に頭を撫でられて、アルフィミイは嬉しそうに返事をした。

歯を磨いて、顔を洗う。スーツに着替えた響介は荷物と手帳を鞆に入れて、玄関で靴を履き替える。

「すまん、今は俺のシャツで我慢してくれ。帰りに何か服を買ってくるから」

「パパの匂いがしますですの……」

自分はロリコンではない（と思う）が、さすがにアルフィミイを裸のままにさせては目のやり場が困る、それに風邪を引きそうなので、昨日洗濯したシャツをアルフィミイに着せた。サイズが大きすぎてふわふわになっているが、アルフィミイ本人は至って満足な様子。

「昼食は出前でいいから、お金はこれを使え」

財布から札二枚を出して、アルフィミイに渡す。春香の一件で今月の給料がすでに全額貰っているから、子供の食費にケチるつもりはない。

いささかりツチな気分になっている小市民な響介である。

「じゃ、俺はもう行くから……って何そのポーズ」

玄関まで見送りに来たアルフィミイは、目を瞑って響介へ唇を突き出した。

「いつてらっしやいのキス、ですの」

「するか！ まったくこういう所はあいつにそっくりだな。もう行くから、変な人が来てもドアを開けるなよ！」

「……ちっ、ケチですの。いつてらっしやい」

キスを断られて口を尖らせながらも、アルフィミイはつれない父に見送りの言葉をかけた。それを聞いた響介は軽いため息をついて、

何とか笑顔を作らせてもう一度アルフィミイの頭を撫でた。

「ああ、行ってくる」

慌てて事務所へ急行して、何とか遅刻だけは免れた。いつも通りに仕事をこなしていると、あつという間に昼飯の時間が近づいてきた。

「今回のCM撮影、あなた様はいかがと思いましたか？」

「そうだな……あのブランドのイメージを考えれば、やはり貴音みたいな子が似合うだろう」

「なぜ、そう思うのですか？」

「お淑やかさと、情熱さと持ち合わせたデザインが多いからな。背伸びしたい若い女の子向けだろう。だとすれば貴音みたいに気品の高くてかつ若い子がイメージにぴったりだ」

「あら、口が上手いですね」

「……仕事上、必要な意見の述べたまでだが」

今の響介は765プロ所属のアイドル、四条貴音と会議室で撮影の打合わせをしている。

若者向けのアクセサリをメイン商品とするブランドのCM撮影ということで、響介は目の前にいるこの、同僚から銀髪の女王と呼ばれるアイドル・四条貴音を選んだ。

その落ち着いた雰囲気と高貴な気質なら、クライアントも頷くのだろう。

春香の一件を片付いたあと、しばらくアイドル達の特性を見極めたいからという理由で、担当アイドルの選定を少し待ってもらえるように高木社長に頼んだが、あっさり許可された。

現在の765プロでは、アイドルが居てもプロデューサーの人手が足りないのが現状。たとえ担当アイドルをさっさと決めた所で、遊撃的なポジションは簡単に変わらないだろう。ただ、唯一の問題

は……

「へえ、私が一人で寂しくCDのサイン会をやっている間に、もう貴音さんとそんなに仲良くなっちゃいましたか……」

「……」

振り返らなくても、背中から感じる真っ黒な禍々しい瘴気で、この声の主が分かる。

いや、できれば振り返りたくない。

「昼間から女の子を口説くとは、いいご身分ですね。プロデューサーさん？」

「……春香」

機械のようにガタガタと首を回転させて、肩から莫大な圧力をかけてくる手の主の名を呼ぶ。

「あらら、お久しぶりですね、プロデューサーさん。三日つぶりでしたっけ？ まだ私の名前を覚えてくれてたんですか……」

前回のテレビ出演の日の翌日から、春香の仕事依頼は明らかに増えてきた。朝から晩まで外にいる日もある。加えて、響介も自分の仕事があるので、ここ数日二人は確かに事務所で顔を合わせる機会がなかった。

「くすくす、どうやら私はお邪魔のようですね。そろそろ昼食の時間ですし、続きは午後にしましょう、あなた様？」

二人のやりとりを見て、貴音は意味深な笑みを浮かばせつつ、ソファから腰を上げた。

「変な誤解はしないでくれ、貴音。これは……」

「弁解して頂かずともよいのです。私も女、ことは理解しております」

言い訳をしようとする響介を制して、貴音は笑顔のまま会議室か

らを抜け出して、事務所から出て行った。おそらく昼食をとりに行くのだろう。

そして貴音が出て行った後響介の隣に腰をかけた春香は、頬を膨らませて責めるような目を向けた。

「ウソツキ」

「……」

「一人じゃないとか上手いこと言っ、家賃が手に入ったら私のことなんてもう用済みですね」

「そういう訳ではない。ただ、お前はもう一人でも大丈夫だろう？」

「へえ〜そういうこと言っちゃうですか……そうですね、どうせ私は貴音さんみたいな気品を持ってませんもんね」

最近春香は、ちよつと手に負えない。

「拗ねるな。事務所の仕事が多いし、春香に付きつきりって訳には行かないことくらい分かるだろう」

「だからって……うん？」

話の途中で春香は何か気付いたようで、くんかくんかと鼻を寄せ響介の首元の匂いを嗅ぐ。

「……何をしている」

「女の子の匂いだ」

「……気のせいだ。もしくは石鹸」

心当たりがないわけじゃない。だが言えない。

朝から裸の幼女に抱きつかれたなんて。

「あつ、目を逸らした！ どういうことだこのムツツリプロデュースーさん！！」

嘘下手な響介の僅かな動揺に反応した春香は、響介の上に跨ってネクタイを掴んで響介の顔に迫る。

「よせ！ 春香」

隣の書類室にはまだプロデューサーの秋月律子がいるし、給湯室に双子アイドルの双海亜美・真美もいる。さすがにこの体勢が見られたらまずい。

(何か、何かこの流れを変えられる程の……)

運がいいことに、このタイミングで事務所のドアを叩く音が響いた。

「……チツ、じゃプロデューサーさん、後でまた問いただしますから」

命拾いした響介の上から降りて、春香はドアの方に向かう。これを機に、響介も会議室から出て隣部屋の自分の机まで移動した。昼飯を持ってさっさと屋上に撤退しよう。

「そういえばアルフィミイの奴、一人でお昼大丈夫だよな……つて、うん？」

鞆をあけると、最近見慣れていた新聞紙包みが見当たらない。

「あれ……？」

今朝ちよつといろいろあったから、そういえば、弁当を鞆に入れたっけ。

「はい、今開けますね……つて」

響介から離れてドアまで移動した春香がアルミのドアノブを回してドアを開けると、

目に入ってきたのは、青い髪の幼い女の子だった。

それも、所謂裸ワイシャツという姿の。

「……あの、何か用かな？」

「パパに弁当を届けに来ました、ですの」

「……パパ？」

「はい、パパ」

と得意げな顔で、女の子が手に持っている弁当箱を春香に見せた。

「南部響介パパ、ですの」

がつくりと、力が抜けて地面に座り込んだ春香だった。

「……そんな、まさか娘さんが居たなんて!!」

「……じゃ律子、今日はこれで失礼するよ」

「バイバイ、ですの」

「あつ、お疲れ様でした。……もうアルフィミィちゃんに裸ワイシャツを強要しないでくださいね」

「違うと言ったはずだ!」

昼の拷問会を経て、何とか出張中の友人から預かった子供ということで皆に納得してもらって、ついでに女の子の服も何とか用意してもらった。

午後はアルフィミィを一人で帰らせるのも心配なので、事務室に居座ってもらったが、何時の間にか律子の手伝いを始めて、しかも要領がいいと律子に褒められた。やがて時計の針が七時を示した時、響介はアルフィミィの手を引いて律子に別れの挨拶をした。

「しかし、南部さんとアルフィミィちゃんも何だか似てますね、本当の親子みたい」

メガネを押し上げて、律子はもう一度アルフィミィと響介の顔を交互に見る。

「目元とか」

そりゃそつだ。遣伝子が使われてるぞ。

「……こいつは母親に似てると思うがな」  
「そうですね？」

「今日はこれで失礼します、お疲れ様でした」

律子と話をしている間、後ろから声をかけられた。振り返ってみると、そこに立っているのは疲れた顔をしている如月千早だった。

「ああ、お疲れ。帰りは気をつけてね」

「はい、有難う」

響介たちと別れの挨拶して、千早は静かに事務所から出て行った。彼女の小さな背中から違和感を感じた響介は、律子に問いかけた。

「如月、何か落ち込んでないか？」

「ああ、千早は最近新曲を収録してるから、それで疲れているの  
だろう」

「そうか」

「問題を一人で抱え込むタイプだからね……何か悩んでるなら相談に来て欲しいけど、彼女もいろいろ事情があるから、迂闊に踏み込めないからな」

「……そうか」

あの日、スタジオで聞いた冷たい歌声、そしてあの一心不乱に歌う彼女の横顔を思い出す。

（如月千早、か。あいつと正反対って感じだが、微妙に似ているな）

今朝の夢のせいか、懐かしい人物の顔が頭に浮かび上がった響介は、無意識に口元を吊り上げた。

「ねえ、パパ。晩御飯はどうするのですの？」

帰りの電車から降りて駅を出て、隣のアルフィミイは響介の手を掴んで、彼を見上げた。

給料が入ったものの、食料は補充してない。今家の棚にあるのは、

大量なカップ麺しかない。

そういえば、エクセレンもカップ麺しか作れないやつだったな。女のくせに。

しかし期待な視線を向けてくるアルフィミイに、さすがに家に帰ってカップ麺食べようと口に出せない。

「そうだな……今日はファミレスに行こうか」

「初めてのファミレス、わくわくですの」

子供の喜ぶ顔を見た父親って、こういう心境かもな。

嬉しそうに笑ったアルフィミイを見て、響介は思った。

「……んで、誰だよ」

先ずは荷物を置こうとアルフィミイと二人で家に戻ると、なぜか自分の部屋の前に一人の男が膝を抱えて体育座りしていた。

しかも横に大量な荷物が置いてある。

「やっと帰って来たか……貴様」

目を擦りながら、男は顔を上げて響介に声をかけた。どうやらここで響介を待っている途中で寝てしまったようだ。

「お前は……!!」

そのワカメのような赤髪、その垂れ目、そしてその暑苦しい口調。かつての思い出が鮮明に蘇る。

「……アホセル・ブルマー!!」

「アクセル・アルマーだああ!!!!」

765芸能プロダクションに入社した新人プロデューサー、南部響介の今日一日を回想しよう。

朝、自分の布団に謎の美少女・アルフィミイを発見。ノイレジセイアの書置きによると、アルフィミイは恋人のエクセレンと響介自分の遺伝子を使った、響介の娘。

そしてアルフィミイを作り出した張本人ノイレジセイアは課長とやらの呼び出しで本部に帰った。

昼、アルフィミイは響介に弁当を届けるために事務所に来た。裸シャツ姿で。

夜、帰すると懐かしいワカメ野郎が家の前で待っていた。懐かしいすぎて名前を間違えたけど。

そして今、アパートの台所から出てきたワカメ野郎はエプロン姿（決して裸ではない）でなべを持ち上げ、ドヤ顔を見せている。

「ふん、待たせたな」

まるで勝ち誇ったような表情をして、アクセル・アルマーは鍋をテーブルの中央に置いて、蓋を開けた。

野菜と牛肉をたっぷり詰めた寄せ鍋だった。一瞬で部屋の中に満ちた濃厚な出汁の香りに食欲をそそがれ、テーブルを囲んでいる親子二人が唾を飲み込んだ。

「……ご苦労。座っていいぞ」

「さつさと座りますですの、ワカメ」

「飯を作ってやったのに態度デカイなおい！」

ボロいテーブルを囲んで、三人はやや遅めの夕食に舌鼓を打ちはじめた。そして当たり前のように、アクセルは鍋奉行の役を引き受けた。

「貴様！ そっちはまだ早いと言ったはずだ！ まずはこっちのを食べえー！！」

「そうか、すまなかつたな」

「ああもう！！ 物事はスマートにだ！！ いいから茶碗を貸せー！！」

「ワカメ、肉を取ってですよ」

「少し待て、こっちが終わったら取ってやる！」

響介の古い茶碗とアルフィミイの新しく購入した小さな茶碗の中に、アクセルは肉と野菜をいっぱい盛り込んだ後二人に返す。

「はい、アルフィミイちゃん。育ち盛りでも肉ばかり食べてはいけない。ちゃんと野菜もたべなさい」

「はい」

自分の茶碗を受け取って、アルフィミイは嬉しそうに笑った。

よく考えたら、これは彼女にとって初めての食卓のようだ。いろいろと新鮮なのだろう。

「所でアホセル、なぜ俺がここに住んでるのをわかった」

「アクセルだっ！ ふん、こっちに来る前に実家の方に寄って、貴様のお袋から聞いたのさ。持ってきた野菜と肉も半分はお前のお袋が持たせたものだ……ってなぜいきなり箸の動きを速める！」

「遠慮する必要がなくなったからだ」

「遠慮していたのかよ！」

「パパ、テレビつけていい？」

三人は騒ぎながら料理を頼張る中、アルフィミイは響介にテレビをつける許可を求める。

「構わんよ」

とくに反対する理由もないし、響介は頭を縦に振ってリモコンをアルフィミイに渡した。それを受け取ったアルフィミイはボタンを押し、テレビの向こうから声を聞こえてきた。

「どうやらリモコンを使い方を教える必要はなさそうだ。」

テレビに映っているアニメ番組に視線を向けながらも箸を止めないアルフィミイを一瞥して、響介はアクセルの方に向き直す。

アクセルは南部親子を交互して見て何か言いたげな目をしていた。

「知り合いから預かった子だ。ジロジロ見るな、通報するぞ」

「見てるだけで犯罪扱いかよ！」

「というか、アホセルお前この数年間どこに行っただ。高校卒業したらすぐ居なくなっただじゃないか」

「アクセルだからな。どこって、そりゃ……世界中にだよ」

「そうか、世界中にか。しかしブルマはもう世界のどこにでも絶滅したらしいから、無駄足だったろう」

「一部の地域にはちゃんと生き残ってるよ！　これがな！！　つてブルマの話はどうでもいいんだよ！！　男だよ！　俺は男を鍛えるために世界中旅してたんだよ！！」

「ああ、わかった、分かったか激昂するな。それより肉を追加してくれ」

「う、ういっ……」

殴打する衝動を抑えつつも、アクセルは渋々と薄く切った肉を乗せている皿を持ち上げた。

四年ぶりなのに、相変わらず馬鹿にしてくれ。

小学生だった頃、親の仕事の都合でイギリスから日本に引越して来たけど、日本語があまり上手くないのと外見のせいで友達が出来なくて、アクセルはずっと一人で教室でぼうつとしていた。

そんな彼に、金を貸してくれと話しかけたのがクラスメイトの響介だった。

その後、響介のお蔭でアクセルはクラスの皆と上手く打ち解けたし、アクセルのお蔭で響介は資金源に困ることなく快適な学生生活を過ごせた。二人はよく互いの家にお泊りするほどの親友であり、何事もアクセルが一方的に勝負を持ちかけて響介に負かされるライバル（多分）だった。

「そう言えば、神夜ちゃんは貴様と一緒に住んでないの？」「綺麗に洗った食器を棚に仕舞って、アクセルはエプロンで手を拭きながらキッチンから出て、アルフィミと一緒にテレビを見ている響介に尋ねた。

「違うな。なぜそう思う？」

アクセルに淹れてもらったお茶を啜りながら、響介は訝しげな視線を彼に向けた。

楠舞神夜、それは響介の四歳年下の従妹の名前である。小さい頃からよく響介に懐いていたが、響介が地元から出て都会に来てからはあまり連絡を取っていない。

つい先日、テレビの中で歌っているアイドルが神夜だと気付くまで、こっちに来ていることすら知らなかった。

「いや、楠舞家の運転手さんに聞いたけどさ、神夜ちゃんは今年からこつちの大学に入学したらしいから、てつきり貴様の所に来ているのかと」

「こつちの大学？」

大学を通っていないながら、アイドル活動していたのか。まあ、この業界では別に珍しくない、765プロでもアイドルの大半は中学生か高校生だし。

「知らなかったのか？」

「ああ。まったく知らん」

「酷いやつだな。神夜ちゃんはあんなに貴様を慕っていたのによ」

「……かもしれんな」

アホセルの言葉を、響介は否定する気にはなれなかった。

楠舞家は地元ではかなりの名家だが、神夜の母親が十年前に他界したため、子供は娘の神夜一人しかない。そこで神夜の父親である楠舞讃岐は親戚である南部家の一人息子である響介が高校卒業した後、神夜の婿として迎え跡継ぎにしようと考えたが、響介はそれを断り、地元から出た。

神夜のことは嫌いじゃない。しかしあの堅苦しい家に縛られるのは嫌だった。

しかしこの一件で、乗り気だった神夜は響介との間に微妙に距離が生じてしまった。

「……」

アクセルはこのことを知らないが、長い付き合いしてた響介の態度からして、何かあったことくらいは察した。

「ワカメ、これは何ですか？」

二人の間の沈黙を打破したのは、アニメを見終えてアクセルの荷物を漁り始めたアルフィミイだった。そして今彼女がアクセルの鞆

から引つ張り出したのは、一着の全身青タイツだった。

「……ア、アイルランドで買った服だ」

「槍は買ってないのですの？」

「や、槍まで買うと、帰る時は色々とまずいからな……」

アクセルの顔が微妙に引き攣ってる。

きつとあれだ。気に入って買ったのはいいけど、恥ずかしくて他人の前では着たくない。

「んで、アホセルお前は結局なにをしに来た」

テレビのチャンネルを適当に変えながら、響介はお茶を啜る。

神夜の所属している芸能プロダクションの名前は既に調べた。765プロでは比べ物にならないほどの大手だが、同じ業界に居る以上いつか対面することになるだろう。

それよりこのワカメだ。

ちやつかり自分の茶碗まで棚に置いて、まさか居座る気じゃねえだろうな。

「アクセルだ!! そんなの決まっている。貴様と勝負するためだ、これがな!」

「帰れ」

「……えっ」

「捨てられた子犬のような顔をするな。俺は明日も仕事だ、何時までも学生だった頃のようにには行かん」

「仕事? 貴様は仕事をしてんのか?」

「何だ、そのまるで俺が真面目に仕事しているのがおかしいだと言わんばかりの表情」

「あつ、いや。てつきり競馬で生活しているのだと」

「……」

二週間前は確かにそうだった。

「それで、何の仕事してんだ？ 麻雀の代打とかじゃねえだろうな」

「ふん、舐めるな。今の俺は芸能プロダクションのプロデューサーだ」

「なるほど。では俺も貴様と同じ仕事を探そう」

「何だと？」

「同じ土俵に立って、貴様を完膚なくまで叩き潰してやるって言ってるんだな、これが」

不敵な笑いを浮かべて、アクセルは挑発的な視線で響介の目を見据えた。

プロデューサーなんてやったこと無いが、戦場に飛び込んで歌を歌った経験もある。

結局誰も聞いてないから、止む無く全員を力で捻じ伏せた後、死体（気絶しただけ）の山の上でコンサートを開くことになったが。

とにかく、この四年間の閲歴をかけて、今度こそこのダメ人間に吠え面をかかせてやる。

「……面白い。ならやって見せろ、出来るものならな」

アクセルの挑戦を、口元を僅かに吊り上げた響介は受けて立った。プロデューサーとしての経験はまだ浅いが、このワカメに負けたらさすがに立つ瀬がない。

「ああ、言われなくてもやってやるさ。それより貴様……明日の弁当のリクエストを言え」

「ん？ 何を言っている」

「俺との決着がつくまで、貴様の面倒を俺が見る。旅で各国の料理も覚えたから、どんなリクエストも応えてみせるぞ。言っておくが、これは貴様が負けた時に言い訳できないようにするためだ、断

じてカップ麺ばかりでは健康に悪いとか心配しているわけではない。あと、このアパートじゃ流石に三人はキツイ。俺の仕事が決まったら、引っ越して貰うぞ」

既に同居する気満々なアホセルである。

「……勝手にしろ」

寝袋を出してきたアクセルを一瞥して、響介は目を瞑ってそう呟いた。

相変わらずお節介なやつだ。お前は俺の母さんか何かか！と言いたい所だが、飯を作ってくれるのはあり難いし、引越しも前々から考えていたことだから、家賃を分担してくれる人間がいれば、色々と楽だ。

丁度今朝にノイレジセイアのやつが本部とやらの顔を出しに行っ  
たし。

まあ、アホセルが家事と料理を引き受けてくれたら、帰ってこな  
くても別に困らんな。

「おい響介、使っていない履歴書用紙はあるか？」

「……これだ」

「おっ、サンキュー。あっ、やべえ、俺の名前の漢字はどう書  
んだっけ」

「お前の名前のどこに漢字が要る」

悪背留・蛙琉魔亜って書くのか。

「ああ、そうだったな。いや、日本語書くのに久しぶりだからさ、  
うっかり忘れちゃったぜ」

「……」

やっぱり根はアホセルのままだ。765プロで雇ってやれるか、  
明日音無さんに聞いてみよう。最近結構忙しいし、人手は欲しいは

ずだ。

決してアホすぎて雇って貰えないとかそんな心配しているわけではない。ただ家賃を分担してくれる人間を失いたくないだけだと解していただきたい。

そう思つて、響介も事務所から貰ったアルフィミイの服をベッドに並んで、整理し始めた。

朝日に照らされているやや古いマンションの一室で、無機質な電子音を鳴っている目覚まし時計に起こされ、青味のかかった黒い長髪の少女はベッドで上半身を起こして、目をこすつて両腕を思いつきり伸ばす。

時計に目をやり、そろそろ支度しないと電車に間に合わないだとなかった少女は、ベッドから降りて洗面所に入った。

少女の名は如月千早、765プロに属しているアイドル。両親が既に離婚した今、まだ16の彼女はこのマンションで一人暮らしをしている。

「……っ」

洗面台の鏡に映っている自分を見て、僅かな目眩が感じた。

軽く喉を鳴らしてみると、そこにちくちくとした痛みが未だに消えてないことに気付く。

せっかくの新曲収録が上手く行かず、屋上で練習しすぎたせいかもしれない。

しかし、元々そんなに売れてるわけでもないし、自分ひとりの都合で仕事の進度をこれ以上遅らせるわけには行かない。

なにより、歌うことに妥協はできない。

パジャマをベッドに脱ぎ捨ててワイシャツとズボンに着替え、玄関で靴を履いた後部屋の中へ振り返って窓際に飾ってあるフォトフレームに視線を向ける。

そのやや古い木製フォトフレームに収めている写真には、じゃれ合っている幼い子供二人が写っていた。

片方は長髪をしている女の子、もう片方は女の子より明らかに年下の男の子。

二人の容姿は、よく似ている。

「……行つて来ます」

誰も居ない部屋に向けて千早はそう独り言のように呟いて、玄関のドアノブに手をかけた。

「千早お姉ちゃん、おっはよう!!」

「千早ちゃん、おはよう!」

「おはよう、春香、亜美、真美」

765プロの事務所に入った途端、既に出勤した春香と双海姉妹から挨拶された。それを返した後、千早は鞆を置いてソファに座った。

朝の朝会が終わったら、スタジオに行つて収録を続ける。プロデューサー達は忙しそうだから、多分独りでバスで行くことになるだろう。

対向席に座っている春香は表紙に「バツイチ子持ちを落とす10の方法」というタイトルが書かれている女性向け雑誌を読みながら、時折妖しげな笑みを浮かべている。

最近の春香はちょっと雰囲気が変わった。その変化は、彼女の歌

まで現れている。

それもあの南部響介というプロデューサーの影響だろうか。

(いつか私にもプロデューサーがつくのだろうか。 だとしたら、歌に理解のある人がいいな……)

しかし正直、今まで独りでやって来た千早としては、プロデューサーをそれほど必要だと感じていない。

それに、人付き合いは元々苦手だ。信頼関係を上手く築ける自信なんてない。

……少し頭痛がしてきた。やはり風邪なのかもしれない。

トーン!!

物思いに耽っている千早の意識を現実へ戻したのは、事務所のドアが吹き飛ばされた音だった。

「ちょいなあっ！ 765プロってんのはここだな!!」

入ってくるのは、スーツを着たハイテンションな男だった。

ワカメのような赤髪を揺らして、男はそのユニークな形をしているエレキギターの弦を弾きながら絶叫した。

「俺の歌を、聴けいいいい!!」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2024v/>

---

THE IDOLM@STER -original generations-

2011年11月3日20時12分発行